

キャラクター名  
都留木 一真(つるぎ かずま)

プレイヤー名

シンドローム	キュマイラ エグザイル	ワークス	傭兵	カヴァー	
オプション	モルフェウス	年齢	22	性別	男
覚醒	無知	衝動	解放	初期侵食率	36 %
出自	親の理解	経験	大失敗	邂逅	友人

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	73
肉体	5	1	0			6	行動値	3
感覚	1	0	0			1	(非装備時)	3
精神	0	0	1			1	戦闘移動	8
社会	2	0	0			2	全力移動	16

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	6		射撃	1		RC			交渉		
回避			知覚	1		意志	5		調達		
運転:	2		芸術:			知識:			情報:軍事	1	
運転:			芸術:			知識:			情報:裏社会	1	
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
インフィニティウエボン	白兵	6r+6	6	Lv+7		

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品	
エンブレム:スワンスイマーズ	
コネ:情報屋	
メモリー:桜小路 道大	

合計装甲: 0 合計回避: 0

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイムス	消費
器物使い	P	N		
桜小路 梅	P 尽力	N 悔悟		
遠山 遥	P 庇護	N 隔意		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 4 残り財産P:

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果: 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果: コスト分のHPで復活								
異形の刻印	8	(3)	常時	至近	自身	自動		
効果: HP+[Lv*5]								
スピードクリエイト	1	2	イニシアチブ	至近	自身	自動		
効果: マイナーで使用する武器作成エフェクト一つを使用できる シーン一回								
インフィニティウエボン	4	3	マイナー	至近	自身	自動		
効果: ダメージ[Lv+7]の白兵武器を作成し、装備する								
千変の刃	3	5	マイナー	至近	自身	自動	120,解放	
効果: シーン中、白兵攻撃の対象を[範囲(選択)]に変更し、ダメージ+[Lv*3]する								
真名の主	3	5	マイナー	至近	自身	自動	120,解放	
効果: エフェクトで作成した武器を指定し、ダメージまたはG値を+[Lv+1]Dする シナリオ一回								
カスタマイズ	1	2	メジャー	武器	-	白兵/射撃		
効果: ダイス+[Lv]個								
コンセントレイト:モルフェウス	2	2	メジャー	-	-	S		
効果: C値-[Lv]								
復讐の刃	2	6	オート	至近	単体	白兵		
効果: リアクションを放棄し、リアクション不可攻撃を行う。その判定のC値-[Lv]する								
報復の牙	1	4	オート	至近	単体	白兵	リミット	
効果: 自分以外を対象とした攻撃の命中判定直前に使用。その攻撃の対象を自分に変更する シナリオ一回								
万能器具	★							
効果:								
物質変化	★							
効果:								
効果:								
効果:								

「剣には鞘が要る。それと同じで、俺は俺なりの居場所を探してるんだ」「剥き身の刃(シースレス)だ。迂闊に触れるなよ、怪我したくなければな」

刃を生み出して使う能力を持つオーヴァード。エグザイルの能力を利用して、体内に大量の刃物を内蔵している戦闘時は体内から取り出した刃物を利用して戦う。これらは彼の身体の一部として扱われ、短い距離なら刃物が刺さった位置への瞬間移動(正確にはそこを基点にした体の再構成)も可能。それだけでなく、至近距離なら攻撃を受けた瞬間、そこに刃を精製することで捨て身のカウンターを行うことも出来る。また、それ以上の隠し玉もあるようだ

【過去】都留木一真は気がかぬ内にオーヴァードとしての力を振るうことができた。といっても、当時は怪我の直りが早いことと腕力が人よりも強いこと程度であって、本人も周囲も個性の一つとして捉えていた。一真自身も自分が全力を出してしまうと他人を傷つけるから、抑えていようと思いつけていた。しかし、あるとき自分の全力を軽くなした桜小路道大という人物に出会い、驚愕すると同時に師事するようになる。初めての経験だったからだだが、免許皆伝のための練習試合の後に彼は頭部の強打によるくも膜下出血という形で命を落としてしまう。そんなことが起き得るはずもないと考えていた一真にとっては衝撃的な事実だった。自分に力があることは分かっていたが、師匠はいつでもそれをいなしめてくれると無意識に思っていた。鍛錬の日々が彼我の技術の差を埋め、受け流すことが困難になっていたのだ。周囲は仕方ないと言った。ただ、その日から一真は自分が犯罪者であると感じ、犯罪者狩りを一種の贖罪として行っている。彼の全身から現れる刃物は自分に近い付いてはいけないという無意識の思いの表れであり、自分が犯罪者であるという認知の現れである